

横 浜 市

歴 史

NEWS
15
2002・9

博 物 館

- ◇特別展「屋根裏の博物館―実業家渋沢敬三が育てた民の学問―」によせて
- ◇一泊二日の古代体験に挑戦! 一古代人まるごと体験講座報告一
- ◇＜研究余話＞ 宿場の火災と防災
- ◇収集・収蔵資料の紹介[16] 享保一一年四月一日付米倉丹後守書状
- ◇＜常設展示室探検＞ 勸工場
- ◇企画展「東へ西へ一律令国家を支えた古代東国の人々―」関連ツアー
古代城柵を訪ねる旅
- ◇ちよいとミュージアムショップたいむ
- ◇＜知ってますか?＞ビデオ「港北ニュータウンの縄文時代」



特別展「屋根裏の博物館」

—実業家洪沢敬三が
育てた民の学問—

によせて

当館では、市内にある研究機関、神奈川県立大学日本常民文化研究所との共同事業として、特別展「くらしを集める くらしを育てる 屋根裏の博物館—実業家洪沢敬三が育てた民の学問—」を開催することになりました。

洪沢敬三（写真1）は、明治維新後日本経済界のリーダーであった洪沢栄一の孫として生まれました。

昭和初期から、第一銀行をは

じめ数々の会社の役員を兼任するなど実業界で活躍し、その後日本銀行総裁、敗戦直後の幣原内閣では大蔵大臣を務めるなど、日本の一番厳しい時期の財政を担った人物です。一方で日本の文化を支えてきた一般の人々である「常民（Common People）」の姿を明らかにするために、既存の学問にとらわれず活動を進めた研究者であり、日本常民文化研究所の創立者でもありました。

敬三は、一九一九〜二〇（大正八〜九）

年ころ自宅の物置の屋根裏に小さな博物館を作り、仲間を集めた化石や玩具などを展示して「アチックミュージゼアムソサエティ」として活動を始めます。その後、一九二五

（大正一四）年にアチックミュージゼアムと名前を変え、「常民」の姿を明らかにする活動を本格的に繰り広げます。

敬三が進めた活動は多岐にわたっていま



写真1



写真2



写真3

すが、その基本は一貫して「集める・調べる・公開する」ということでした。たとえば敬三は仲間と一緒に、人々の普段の履き物である足半

（アシナカ）とよばれる草履（写真2）を全国から三四七点も集めました。そして、当時まだ医療器具としても珍しかったレントゲンを使って、芯に使われている縄の構造を調べたり、結び方を比べて分類しました。また、中世の絵巻物から足半草履を履いた

人たちの姿を探したり、『群書類従』や『史籍集覧』等に収められた記録から足半の記事を抜き出し、足半の起源や使われ方を調べました。敬三はこの成果を『所謂足半（あしなか）に就いて』という報告書にまとめ、出版しています。

また、伊豆内浦（静岡県沼津市）の旧家で、戦国時代から明治期までの三千通以上に及ぶ漁業や租税に関する史料（写真3）の存在を知りました。敬三はその史料をすべて筆写し、活字化して『豆州内浦漁民史料』という史料集として出版しました。当時は、研究者の目は政治的に重要な史料に向けられており、大名あるいは有力社寺のような史料は活字化された史料集がありませんでしたが、常民の史料を群として把握し、余すことなく活字化した例はなく、敬三の仕事は注目を浴びました。後に敬三は、『豆州内浦漁民史料』により日本農学賞を受賞しています。

敬三は、調査や研究の成果は余すことなく公開し、誰もが利用できるように還元することを念頭において、出版を重要視していました。地域にくらす農民や漁民達が記した日記やくらしの記録を活字化したり、ある地域を経済学・社会学・建築学・民俗学といった広い視野で調査を行い、その成果を出版するなど、敬三は一九三四（昭和

九）年から一九四五（昭和二〇）年までの間に約一〇〇冊ほどの出版を手がけました。さらに、さまざまな博物館や資料館の設立も計画しました。敬三は集めた資料を展示を通して紹介したり、保存の措置を講じることまでも考えていたのです。

こうしてみると、敬三の活動は現在の博物館や資料館の活動そのものということができます。当館に即してみれば、館の主要テーマは「横浜に生きる人々の生活の歴史」であり、その基礎となる古文書などの歴史資料・発掘した考古資料・人々が使っていた民俗資料を収集しています。人々の生活の歴史を明らかにするためにさまざまな視点から調査研究を行い、その成果は企画展、あるいは図録・報告書・目録といった出版物、また講座・講演会・体験学習として公開しています。この活動を今から七〇年以上前から繰り広げていた敬三は、まさに現在の「地域博物館・資料館の父」といえるのではないのでしょうか。

今回の展示では、彼らの収集資料と調査成果、調査先に残されていた記録や写真などを通して、敬三が進めた「集める・調べる・活用する」さまざまな活動を紹介します。これらを通して、洪沢敬三が行った「民」と「学問」への想いを知っていただけたらと思います。

（刈田 均）

一泊二日の古代体験に挑戦！

古代人まると体験講座報告

今から約二〇〇〇年前、大塚ムラに住んだ人々の暮らしはどのようなものだったのでしょうか？

国指定史跡大塚・歳勝土遺跡公園において「古代人まると体験講座—大塚ムラの一日体験—」が八月一三・一四日に行われました。この催しは都筑区との共催事業ですが、遺跡公園の活用の一環として博物館が実施しています。

参加者は、全員貫頭衣かんとういという弥生時代の服を着ます。夜は大塚遺跡内に復元した竪穴住居に泊まり、翌日のお昼までの一日半、考古学の成果からヒントを得た様々な体験学習を行います。

竹の食器作りに始まり、大塚ムラのスケッチ、火おこし体験、石器や土器を使っている古代食作り、麻ヒモ作り、夜になれば竪穴住居で弥生の楽器でゲームをしたり、オカリナの演奏会を聴いたり、一日中住民たちは大忙しです。

翌日は、再び石器や土器で朝食作りをして、勾玉作り。ここまで出来れば、もうりっぱなスーパード弥生人。閉村式では、スーパード弥生人技術資格認定つき「大塚ムラ住民カード」が与えられます。

三回目になる今年は、企画展「たのしい考古学」にあわせ、初めて夏休み期間中の



食器ができないとごはんが食べられないよ



火おこし一番はどこのグループかな？

開催となりました。抽選で選ばれた二八名の小学五・六年生が一泊二日の古代体験に挑戦しました。

当日は晴天で、暑い一日となりました。ほとんどが野外での体験学習となるため、日よけを準備して日陰で作業ができるようにしました。

竹の食器作りは、毎年最も人気の高い体験学習の一つです。「魏志倭人伝」の記述をヒントに考え出されました。一本の竹から枝を落とし、自分の食器を作っていく作業は、今では貴重な体験といえるでしょう。

またお昼には本講座とは別に、「古代米ひとくち体験」として、先着一〇〇名の方

に土器で炊いた赤米を試食していただきました。立秋は過ぎたといえ、まだまだ暑い最中の昼時に、公園に一〇〇人も来るだろうかと、スタッフは心配しましたが、予想に反し多くの方々に来ていただきました。

遺跡ガイドボランティアによる大塚・歳勝土遺跡の解説を受けた後は、大塚ムラのスケッチです。短い時間での大急ぎのスケッチでしたが、子ども達はがんばりました。このスケッチは、企画展「たのしい考古学」の開催期間中、博物館内の廊下に展示されました。

火おこし体験は、マイギリという道具を使ってグループごとの火おこし競争をしま

した。一番早いグループには博物館特製「古代人 達人はちまき」をプレゼントし、炊事のために点火をする榮譽が与えられました。

夜は四棟に分かれて竪穴住居で眠りました。その夜はベルセウス座流星群が活動中で、全員で流れ星を観察した棟もありました。日中は非常に暑かったのですが、夜になると意外にも気温が下がり、なかなか快適な寝心地だったようです。

朝食では、一人一匹ずつアジをさばきました。はらわたを触ったとたん、貧血をおこした子どももいて、スタッフを慌てさせました。体験期間中は夜間もふくめて常時看護師の方に待機していただいています。この時も、看護師さんにてきぱきと対応していただきました。あとは、魚嫌いなならないことを祈るばかりです。

今年の「古代人まると体験講座」も無事に終了しました。この事業は、博物館の全係からスタッフが参加し、土器作り教室のOB会である「横浜縄文土器づくりの会」、遺跡ガイドボランティアの協力で成り立っています。決して若いとはいえない我々スタッフも奮闘しました。

大塚ムラの住民になる前とは少し違った表情で、迎える家族と帰って行く子ども達の笑顔がスタッフのなによりの喜びです。

大塚ムラの住民になったみなさん、古代の生活はいかがでしたか？ 歴史に興味をもってくれたかな？ また博物館へ来て下さい。
(亦野あゆみ)

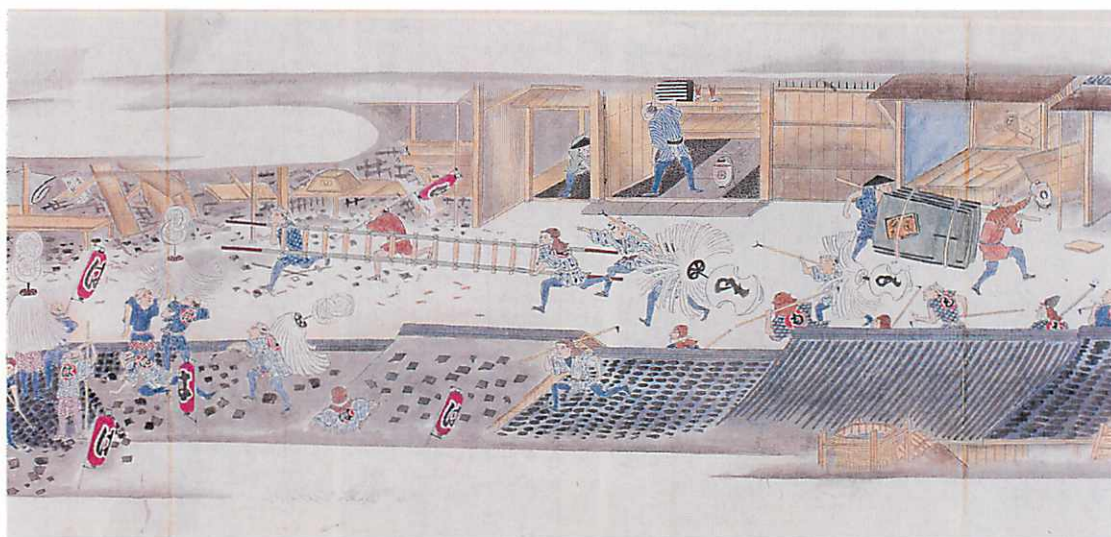
宿場の火災と防災

一 市域三宿の火災

街道の宿場は家が密集しているため、一度火災が起ると、その被害は大きいものになりました。横浜市域の三宿も例外ではありませんでした。主な火災をあげると、保土ヶ谷宿では、寛文三年（一六六三）一月に五〇〇軒、享保元年（一七一六）正月に二二五軒、天保一年（一八四〇）二月には一五八軒を焼く火災が起き、戸塚宿では、嘉永七年（一八五四）一〇月と慶応三年（一八六七）九月に大きな火災が起きています。神奈川宿では、天保二年（一八三一）正月に一二〇軒を焼く大火が起き、神奈川町の石井本陣が焼けています。慶応四年（明治元年、一八六八）正月の大火は、神奈川宿から新宿村や東西子安村へ飛び火し、浦島寺として有名な観福寺などが焼失しています。大火と呼ばれるこのような火災のほか、中小規模の火災も頻繁に起き、宿場の疲弊の原因となりました。

二 防火と消火

そのため、宿場では日頃から防災に対



「火事図巻」(当館蔵)

する備えが義務付けられていました。ここでは関連史料が残る保土ヶ谷宿と神奈川宿の実例を紹介しますが、保土ヶ谷宿では軽部本陣史料を多く掲載している『保土ヶ谷区郷土史』、神奈川宿では石井本陣史料の願書留や日記が基本文献です。なお、防災の単位は宿場内の町だったようです。保土ヶ谷宿は保土ヶ谷町、岩間町、神戸町、帷子町の四町から構成され、神奈川宿は神奈川町と青木町の二町から構成されていました。

神奈川宿では、冬場や風が強い日には、宿役人から「火の元用心」の触れが廻されました。触れの中には、水桶や梯子の用意、くわえ煙草の禁止など、具体的な指示のあるものもありました。火の番も宿役人から触れられました。火の番が廻るのは火災の多い季節が中心で、保土ヶ谷宿に出された廻状には、九月から翌三月までとあります。

す。火の番の体制に関しては、『保土ヶ谷区郷土史』に、九月から三月の間に軒別二人ずつ、風の強い時には軒別四、五人ずつ出て、鉄棒、ささら竹、拍子木を持って夜廻りしたとあります。ただし、九月から三月までの火の番の指導が厳密に守られていたかは疑問で、神奈川宿の場合は、文政一二年（一八二九）の石井本陣日記に、十一月一日から火の番を始めるとあります。火災の少ない季節の火の番については、文政一二年四月の台風と文政一三年四月の不審火直後の二例のみであり、むしろ例外的な処置かと思われます。

神奈川宿の火の番体制に関しては、日記の記事から断片的に知られるだけです。日記によると、自身番屋が設けられ、各町から二、三名の者が出ています。幕府からの触れでは、本来宿役人が中心になって火の番を勤めるようにとありますが、神奈川宿では勤めていませんでした。天保二年（一八三一）の大火以降は、宿役人が率先して火の番にあたる姿も日記には見え、「風烈二付大廻り、役人共組頭、夜通相廻候」（天保四年二月九日）

などがあります。天保二年の大火では、宿役人は「御叱」を受けており、おそらく、その際に厳しく火の番が申し付けられたものと考えられます。先の神奈川宿の火の番開始時期（十一月）の遅さも、神奈川宿の怠慢であったと理解した方が良いかもしれません。

宿場が防災組織である火消組合を組織していた例は少なくありません。保土ヶ谷宿の例は『保土ヶ谷区郷土史』に紹介されており、宿内の保土ヶ谷町、岩間町、神戸町、帷子町の四町を四組（ほ組、い組、と組、か組）に分け、一組二、三十人ずつで消火にあたったとあります。しかし、典拠が示されておらず、確かなことは分かりません。

神奈川宿における火消組合については、その始まりや詳しい組織内容・規模は明らかにできません。やはり日記からその存在と断片的な活躍が知れるのみです。文政一三年一月三日には、妙仙寺門前に住む熊治郎の灰小屋から出火し、両町（神奈川町と青木町）の火消しが大勢出たとあります。また、文政一三年二月と天保三年（一八三二）閏一月の保土ヶ谷宿の火災では、神奈川宿の火消しが出向いており、記事は少ないですが、神奈川宿の火消しの存在がうかがえます。

火災が起きると、周辺地域間で相互協力がなされました。神奈川宿の天保二年六月の火災の際には、「近村より火消見舞多分出候」（日記）とあり、近村の火



消が駆けつけています。また、先に示したように保土ヶ谷宿の火災に神奈川宿の火消が出向いた例もあり、地域間の火消の相互援助体制は当時確立されていたようです。

被災後の援助では、天保二年正月の大火の際、早くも翌日には「永田村より人足拾人程、外村方より人足来り灰取片付

申候」（日記）とあり、永田村（現南区）を始め、外の村々から人足が来て、灰の片づけをしています。生麦村（現鶴見区）からの援助も見え、同村の名主関口家は、神奈川宿の大黒屋や秩父屋、羽沢屋に握り飯などの食料や灰掻き人足を連日にわたリ遣わしています。三日目には当座の建築資材でしようか杉丸太を船で運んでいます。永田村や生麦村などで見られた火災時の援助活動は、他の周辺村々でも行われていたに違いありません。

三 火災後の手続き

火災の後にはすぐに届けが出されます。届けには、出火の火元、原因、被害状況（火元の被害、類焼の程度）、そして「御用御継立、其外御休泊等、御差支無御座候」など宿場の公務への影響が記されました。届けが出されると役人が検分によつて来て取調書が作成されます。この取調書には被害状況を示す図面が添えられるのが一般的でした。取り調べが終わると、火元の親類や組合が火元の罪の許しを願うのが普通でした。

届けや願書にはしばしば、火元の者が「入寺相償」との文言が見えます。入寺とは、寺入、欠入（駆入）などとも呼ば

れ、当時の人びとが、何か犯罪や違法な行為を起こした時、寺に駆け込むことを言います。この慣行は、本人にとっては謝罪や謹慎を示す行為であり、また本人に対する一種の制裁処置として、さらに本人にかかる過重な罰則の軽減・回避手段として、中世から広く見られました。

入寺慣行は、近世に入ると寺院の持つアジール性（聖域性、不可侵性）の損失により、駆け込み寺として有名な鎌倉東慶寺や上州満徳寺など一部の寺を除き薄れたとされてきましたが、近年の研究により、在地社会で根強く残っていることが明らかになってきました。とりわけ、事例が多いのが、火災の際に火元が入寺するもので、一般に「火元入寺」と呼ばれています。火元入寺は、保土ヶ谷宿では『保土ヶ谷区郷土史』で四事例、神奈川宿では石井本陣資料（「願書・訴訟留」、『日記』）で一・二例が確認できます。駆け込んだ寺の名前は一部しか分かりませんが、保土ヶ谷宿では岩間町の円福寺が二例、二俣川浄性院の一例が確認でき、神奈川宿では、神奈川町の慶運寺が二例、成仏寺が一例、金蔵院が一例確認できます。火元は寺に入り、謹慎し処置を待ちますが、この謹慎により罪は軽減されます。文政一三年（一八三〇）四月、類焼七軒の被害を出した慶運寺門前銀右衛門は五日間、天保二年六月に類焼五軒を出した新町徳黄は五〇日間の入寺によつて、それぞれ「御免」となっています。

（井上 攻）

享保一一年四月一日付米倉丹後守書状

金沢区六浦に陣屋を構えた金沢藩米倉家は、市域に本拠を置く唯一の大名として、江戸時代の市域を考える上で重要な存在です。ここでは、享保一一年（一七二六）四月一日に当時の当主米倉丹後守忠仰が出した書状を紹介してみましよう。なお、この書状は平成一二・一三年に博物館へ寄贈された金沢区萩原義則氏

の旧蔵資料にふくまれていたものです。萩原家が米倉家の家臣であることから、もともと米倉家に伝来していたものがある時期に萩原家へ下付されたと考えられます。

資料の内容は次の通りです（写真参照）。

私儀、今度日光御用被
仰付、難有奉存候、彼地江罷
越候付、私末男子無御座候間、
若不慮之儀御座候者、続者
遠御座候得共、寄合米倉
采女次男虎之助、当午
五歳罷成候、此者江跡式被
仰付被下候様奉願候、右之外
親類由緒之者之内二相応者
無御座候、尤私帰府仕候節、此
願書御返可被下候、以上
享保一一年
四月十一日
米倉丹後守（花押）
戸田山城守殿
水野和泉守殿
松平左近将監殿
松平伊賀守殿

書状の内容は、忠仰が「日光

御用」Ⅱ日光祭礼の奉行として赴くにあたり、もし日光において「不慮之儀」（Ⅱ死去）が生じた場合は、自分には男の子どもがいないので、親戚の米倉采女昌倫（三千石の旗本）の次男虎之助（五歳）を跡継ぎとしてほしい旨を、いずれも幕府老中の戸田山城守忠真・水野和泉守忠之・松平左近将監乗邑・松平伊賀守忠周へ依頼したものです。また、無事に「帰府」（江戸へ帰った）時には、この「願書」（この書状自体のこと）を返却してもらおうこととしています。

忠仰は、五代綱吉の側用人として権勢を振るった柳沢吉保の六男で、米倉丹後守昌照の養子となりました。『寛政重修諸家譜』巻百六十九によれば、宝永三年（一七〇六）生まれで、享保一一年当時、二〇歳前後の若者でしたが、享保二〇年に三〇歳で病死しているように、生来病弱であったようです。おそらく日光での職務遂行と往復の旅は、忠仰の身体にとってかなり過酷なものであるという認識があったのでしょう。家の存続という大名にとって最も重要な事柄をふまえ、万一の事態に備えたのが、この書状が出された理由と思われます。（斉藤 司）

検探室展示常設

勸工場

勸工場は「かんこうば」と呼びます。といっても物を作る工場ではありません。今でいうショッピングセンターみたいな所です。

勸工場は明治の中頃に東京にできたのが最初といわれています。勸工場の中には、西洋雑貨・文房具・袋物（かばん）・おもちゃ・時計などさまざまな物を扱うお店がたくさん入っていました。一つ一つのお店がとても小さく、中には1坪（畳2枚分）しかないお店もあったそうです。そんな小さなお店が大きい勸工場では何百軒も並び、しかもそれぞれ違う品物を扱っていたのですから、今のフリーマーケットのように、見ているだけで心がはずんだことでしょう。



模型は、伊勢佐木町（中区）にあった勸工場「横浜館」の正面部分です。明治後半の伊勢佐木町は、東京の銀座に並ぶ繁華街で、ハイカラな「横浜館」はその入口にありました。当時のハマッコがウィンドウショッピングを楽しんだところなのです。

企画展

東へ西へ——律令国家を支えた 古代東国の人々—— 関連ツアー

古代城柵を訪ねる旅

この春に開催した企画展「東へ西へ——律令国家を支えた古代東国の人々——」では、東北地方に設置された城柵の発掘成果を軸に、東北経営や対蝦夷戦争の負担を課せられた東国地域の人々の動向を描くことを主題の一つとしました。この際、せつかくだから実際の城柵跡を見学するツアーはできないだろうか。との話があり、旅行社の協力を得て実現したのが今回のツアーでした。宿泊をとまなう遠出のツアーは、博物館として初めての試みでした。

五月八日・九日の一泊二日のツアーの



多賀城廃寺にて、高野芳宏氏（中央）の説明を受ける参加者



志波城跡の復元された築地堀に触れる

行程は、東京駅から仙台駅まで新幹線、そこからツアー・バスで仙台市の郡山遺跡、東北歴史博物館、多賀城廃寺、多賀城跡をめぐり、平泉で宿泊。二日目は、中尊寺を見学した後に、水沢市埋蔵文化財調査センター、胆沢城跡、北上して盛岡市の志波城跡を見学し、盛岡駅から新幹線で帰るというものでした。考古学や歴史に関心をもつ方、展覧会を見て参加された方など三〇名弱の参加者を得ることができました。

移動するバスの中では、随行した担当学芸員が各城柵の概要を案内しましたが、各々の城柵跡では、発掘調査を担当された方々からていねいな解説、ご案内をいただきました。古代国家が設置した初めての城柵である郡山遺跡では、仙台市教育委員会の木村浩二、長島栄一、松本知彦氏により、中学校の校舎一階部分に保存・整備された遺構を中心に案内いただきました。通常、個人では見学

できない遺構を見せていただくことができ、ツアーは上々の滑り出し。東北歴史博物館では、館内見学の後、高野芳宏氏（博物館企画部長）のご案内で多賀城廃寺、多賀城跡の南門・政庁をめぐりました。高野氏の発掘調査時の思い出を交えての解説は、とても興味深いものでした。また、特別に覆屋の扉を開けて、多賀城碑を直に見せていただいたのには、参加者一同感激ものでした。二日目の胆沢城跡では、伊藤博幸氏（埋蔵文化財調査センター副所長）の解説により遺物と現地を見学。政庁の復元模型の前では、造営一二〇〇年の胆沢城をめぐり、様々な質疑応答で盛り上がりしました。志波城跡の復元された外郭南辺築地と南門は圧巻でした。盛岡市教育委員会の似内啓邦、津嶋知弘氏の説明を受けながら、築地堀の版築に触れてみたり、特別に昇らせていただいた南門上層からの眺めに入ると、参加者は最北の城柵に感じ入りしました。

仙台市から盛岡市にわたる城柵を訪ねる旅は、必ずしも充分な見学時間をとることができませんでしたが、しかし、それぞれの城柵の現地に立ち、発掘調査を行った方々から直接話を聞くことができ、遠く、古代の東北の世界へ、城柵で活動した古代東国の人々へと思いを馳せることができました。ツアーは概ね好評を得、博物館の企画として、今後もこうしたツアーを計画して欲しいとの要望が多く寄せられました。（平野卓治）

ちょいと

ミュージアムショップたいむ
Museum Shop Time



オリジナル缶バッジ



好評発売中！



1個 220円（税別）



写真のもの以外にもいろいろな色があります。



今後の企画展のお知らせ

◎特別展「くらしを集める くらしを語る 屋根裏の博物館
—実業家渋沢敬三が育てた民の学問—」

10月12日(土)～11月24日(日)

渋沢敬三は、大正末期から昭和中期にかけて実業界や政界で活躍した人物ですが、人々のくらしに関心をもち続けた研究者でもありました。アチックミュージアム(屋根裏の博物館)と名付けた博物館をつくり、郷土玩具などを展示したり、民具やくらしを記録した古文書の収集、地域の総合調査などさまざまな活動を行いました。本展では、そのアチックミュージアムを受け継いでいる神奈川大学日本常民文化研究所と共同して、敬三と仲間たちの活動を、収集資料や調査研究などをとおして紹介します。

◎平成14年度横浜市指定・登録文化財展—新指定文化財を中心に—
12月14日(土)～1月13日(月)

横浜市内では、市内に遺された貴重な文化財の保存・活用のため、文化財の指定・登録を行っています。本展では、今年度新しく指定・登録された文化財や関連する資料などを展示紹介します。

◎企画展「江戸時代の獅子ヶ谷村—絵図・古文書で探る村と名主—」
平成15年1月25日(土)～3月9日(日)

江戸時代の武蔵国橘樹郡獅子ヶ谷村(鶴見区獅子ヶ谷)の名主であった横溝家の屋敷は、現在横浜市農村生活館獅子ヶ谷横溝屋敷(市指定文化財・旧横溝家住宅)として保存され、多くの市民が訪れる所となっています。本展では、その横溝家に伝来した文書などから、当時の獅子ヶ谷村のようすと名主家のあり方を紹介します。

◎特別展「古代日本 文字のある風景」
平成15年4月5日(土)～5月11日(日)

??????知ってますか??????

ビデオ「港北ニュータウンの縄文時代」

1万年以上続いた長い縄文時代。当館の所在する都筑区の港北ニュータウン内からは247か所にもわたる縄文時代の遺跡がみつかっています。しかも、最も古い時期にあたる草創期から弥生時代直前の晩期にいたるまで、全ての時期の遺跡がそろっているのです。

これら縄文時代の遺跡を紹介するために、博物館では1999年に「港北ニュータウンの縄文時代」というビデオを制作しました。全国的によく知られている花見山遺跡(都筑区見花山・草創期)や南堀貝塚(都筑区南山田・前期)、大型の集落遺跡である大熊仲町遺跡(都筑区仲町台・中期)など、関東地方を代表する遺跡を紹介しながら、当時の人々の暮らしの移り変わりや、遺跡のあった場所の現在の姿などを、18分間の番組としてご覧いただけるようになっています。

「港北ニュータウンの縄文時代」は常設展示室の映像コーナーで公開中です。ぜひ常設展示とあわせてご覧ください。展示の内容がより身近なものになることでしょう。



(2002年4月1日～2002年9月30日)

- 4月3日 「第6回私たちが作った縄文土器展」開催(7月7日まで)
- 4月6日 企画展「東へ西へ一律令国家を支えた古代東国の人々」開催(5月12日まで)
- 4月14日 企画展関連講演会 館野和己「奈良の都と東国社会—古代の都鄙間交通—」
- 4月20・21日 体験学習「小田原ちょうちんづくり」
- 4月28日 企画展関連講演会 今泉隆雄「古代国家の東北経営と東国社会」
- 5月14日 歴史講座「横浜の歴史」(6月18日まで連続6回)
- 5月23日 <ふるさと横浜探検1>大塚遺跡と登呂遺跡
- 5月25・26日 体験学習「まがたまづくり」
- 6月1日 2002FIFAワールドカップ記念文化催事「ようこそ、歴史の横浜へ」開催(7月7日まで)
- 6月22・23日 体験学習「まがたまづくり」
- 6月25日 歴史講座「横浜の歴史」パート2<横浜アンダーグラウンド・ヒストリー>(7月23日まで連続5回)
- 7月7日 エントランスホールコンサート「星に願いを セタに贈る歌のコンサート」
- 7月24日 体験学習「かざぐるまづくり」
- 7月25日 <ふるさと横浜探検2>寺家の谷戸
- 7月27日 企画展「たのしい考古学」(9月16日まで)
- 8月1・2日 体験学習「そめもの」
- 8月7・8日 体験学習「土偶づくり」
- 8月10・11・17・18日 夏休みみえき教室
- 8月13・14日 古代人まるごと体験講座・古代米ひとくち体験
- 8月23・24日 体験学習「まがたまづくり」
- 8月25日 野焼き
- 9月5日 防災訓練
- 9月26日 <ふるさと横浜探検3>よこはま事はじめ—関内地区—
- 9月28・29日 土偶づくり

横浜市歴史博物館 ● 日誌

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

編集後記

博物館ニュースへの感想をたくさんいただきありがとうございます。バックナンバーをすべてとってくださっている方や、みずみずまで目を通して下さっている方からご意見いただき、本当に嬉しく思います。小学生の方から子ども向けの記事をといてご意見いただきました。今後ともみなさんによるこんごういただけるニュースを目指して発行していきたいと思っております。

●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)

大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

歴史博物館・大塚遺跡

月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

都筑民家園

毎月第3月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区分	個人	団体 (20人以上1人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。

◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。

◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分

(「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分)



駐車場あり(2時間400円)

●インターネットホームページ

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

